

## 現代風俗考 一割烹着の歴史的な役割について一

○岩崎雅美

(奈良女大)

目的 今日服装の中で風俗として定着している割烹着について、その歴史的な経過や女性の生き方との関連について明らかにする。

方法 明治期から昭和期の婦人雑誌、学校や大学の記念誌、記録用・報道用の写真などを主たる資料とした。

結果 明治30年代東京で割烹店は茶屋、あるいはお茶屋と称され、季節の料理品を売る店であった。白地キャラコの割烹着の出現については数説あるが、袖無し、襟無しの当時の西洋前掛に広い袖を付けた形である。

明治30年代末頃から女医学校の教師や生徒が手術演習をする時、女髪結いの仕事着、薬学生の実験着、製薬所の仕事着などにみられる。当時の衛生思想の普及に合わせた清潔さを求める実験実習の衣服であった。ゆえに「白き服」などと呼ばれている。

一方大正初期から女学校や師範学校の教科書に、「割烹前掛」、「割烹用前掛」という名称で形や作り方が掲載されるようになり、中には「割烹服」という付属品の前掛よりも少し重い扱いの呼称もみられる。明治期の日本人は人前や客の接待には前掛や被り物はずす礼儀、習慣をもっていたが、西洋前掛や事務服など新しい衣服の出現により、その意識に変化が起こっている。

昭和6年の満州事変後、大阪の主婦が台所着で兵士への奉仕を行ったことから、白エプロンが外でも用いられ、「女中の服」といわれながらも大日本国防婦人会の制服にまで昂揚した。